烈祖成績

二

烈祖成績巻之二

永禄六年（一五六三）
至十二年（一五六九）

永禄六年癸亥春、織田信長、神祖と約し、女（むすめ）を以て世子竹千代に妻（めあ）はす。年譜・家忠日記・松栄紀事

五月、神祖、郊外に放鷹（よう）し深溝城に抵（いた）る。城主松平伊忠、之を享（きょう）す（もてなす）。神祖、蒼鷹を伊忠に賜ひて曰はく「長沢、敵と境相接し最も要害の地たり。武田信玄の屢（しばしば）覬（き）覦（ゆ）する（様子をうかがう）所なり。彼の城を守る者汝に過ぐる無し（汝以上の者はいない）。吾の為に往き之を守れ」と。伊忠之を辱（かたじけ）なしと拝命す。

六月、長沢城に移り之を守る。信玄、出兵する能はず。神祖、書を賜ひ之を褒め采邑を増す。家忠日記・鵞峯文集・本光寺碑・松栄紀事

七月、神祖、吉田城を攻めんが為に寨（さい）を小阪（坂）井・牛窪に築き、親（みずか）ら之を按行す（しらべる）。城主小原襃（資カ）良、出兵し小阪（坂）井に陣す。渡辺守綱・蜂屋半之丞、槍を揮ひ

刀戦す。松山宮内鳥銃を放ち之を攻む。守綱創(きず)せられ、我兵疲れ頓(とど)まる。平岩親吉、兵を率ゐ来援す。敵兵敗走し城に入る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事　参河に浄土真宗の寺三つ有り。曰はく佐崎上宮寺、曰はく針崎正満(勝蹇)寺、曰はく野寺本證寺なり。無知の士庶、其の法を崇め奉り根拠盤結（複雑で処置しにくい）。時に神祖、塞を佐崎に築く。頗(すこぶ)る糧食に乏し。

九月、酒井正親、菅沼藤十郎定顕後称越後守をして糧を上宮寺に借せしむ。住持の僧、其の求に応ぜず。発言（無）礼にして定顕怒り糧を奪ひて還る。僧徒憤恚(ふんい)（いきどおる）し一宗の僧上宮寺に会す。甲を擐(ぬ)き兵を提げ（よろいかぶとを身に着け武器を持つ）定顕の家に入り糧を取り寺に還る。定顕、正親に訴ふ。神祖之を聞き怒り、正親に命じ首(かしら)の悪僧を捕へ之を斬る。僧徒益々(ますます)憤る。

十月、国中の檀越に勧め兵甲を聚(あつ)む。潜かに今川氏眞に通ずる者を誘ひ乱を作す。譜第の士、其の門徒多く皆之に党(くみ)す。帰依一向宗者俗謂之門徒　僧徒牌(はい)（看板）を書き之に授

けて曰はく「進むは極楽世界に往生するに足り、退くは無間地獄に堕落するに足る」と。是に由り其の志弥堅し。吉良義諦、東條を以て叛す。荒川頼持、姻親を顧みずして義諦に党す。松平家次、頼持と比(したし)む。桜井を以て叛す。松平七郎親光（故岡崎城主左衛門尉昌安子）大草を以て叛す。酒井忠賀、素(もと)叛心有り。以為(おもえら)く時を得たりと。上野城に拠り、鳥居四郎左衛門・芝山小兵衛定好・本多弥八郎正信等十余人を誘ひ叛す。（正信佐渡俊正子、後称佐渡守、為執政九老）蜂屋半之丞・久世平四郎長宣（平太夫廣長第二子、徳川記又書久世三四郎。拠諸士伝略、三四郎廣宣、長宣子。汝時尚幼。徳川記誤矣）・筧正重・渡辺八郎五郎義綱（清兵衛有綱第二子）・渡辺源五左衛門高綱（二郎四郎氏綱子）其の子守綱等八十余人正満寺に拠る。大津半左衛門・犬塚甚左衛門等及び吉良近邑橋人（のぼせあがり者）本證寺に拠る。大田善大夫吉正（正或作政）・矢田作十郎・戸田三郎右衛門忠次等十余人（忠次左近政光之孫、荘左衛門光忠子）上宮寺に拠る。土呂寺亦其の宗門たり。大橋傳十郎・佐馳甚兵衛等七十余人寺に拠り乱を作す。無慮数百人、宗族勲旧悉く邪徒に党す。寇賊(こうぞく)

蟻聚糜爛鼎沸（あだする者蟻のように多く集まり騒ぎ乱れる）。土呂・針崎、岡崎の南に在り。岡崎を距つること甚だ近し。野寺・佐崎・桜井、岡崎を距つること一里余にして、上野城其の西北に在り。上和田は岡崎を去ること半里可。賊の出兵するに及び必ず遞て烽を挙ぐ。神祖、烽起を見る毎に即ち諸城を馳せ救ふ。賊其の来るを見懼伏し寺に入る。酒井正親、西尾城を守り野寺及び荒川頼持の兵と戦ふ。酒井忠次、寨を築き上野賊の往来の路を塞ぐ。松平伊忠、深溝城を守る。按ずるに、是に先んじ伊忠移り長沢に在り。蓋し乱を閉し還り本城を守るなり本多廣孝、土井城を守り、土呂・針崎の賊と戦ふ。松平清善徳川記作玄蕃允家清。松栄紀事作玄蕃允清宗。按に、家清、清善の孫、清宗、清善の子なり。今家忠日記に従ふ竹谷城を守り、松平紀伊守家忠紀伊守家廣子、初称又七郎形原城を守る。松平信一、藤井城を守る。松平左馬介親俊松栄紀事作右京亮、拠福釜松平系図右京亮親俊、父親次也。徳川記作右京亮康親。康親、親俊子也。亦称右京亮。福釜系図親俊下載撃野寺・針崎之賊戦功。今拠之定為左馬助親俊福釜城を守り野寺・桜井の賊と戦ふ。石川家成・其姪數正・本多忠眞・其姪

忠勝・植村家政・植村正勝・内藤弥次右衛門家長及び弟三左衛門信成家長、弥次右衛門清長子。信成、実島田久右衛門子。清長子養之。後称豊前守・鳥居忠吉・松井忠次・天野康景・柴田七九郎康忠諸士伝略曰はく、康忠、射を善くし、戦ふ毎に敵を射、名を得る。故に其の姓名を箭上に鐫(うが)ち之を射ること数百。敵其の芸に嘆じ、射る所の矢六十三隻を拾ひ、死傷者姓名を書き我軍に送る。神祖、之を褒め、諱字を賜ひ六十三三（衍）字を旗幟に書かしめ七九郎と改称すと。六十三の数を表すなり。按ずるに、伝略、家伝の説を載(の)すること、此の如し。然れども其の何時何地に戦ふ所かを如（知カ、欄外に「如疑知」）らず・平岩親吉・筧重忠・八国府甚六・林藤助等一百余人 按ずるに、家忠日記・徳川記・徳川歴代・松栄紀事等の書、諸寺叛徒及び岡崎に在る効忠諸士の姓名を詳載す。今一一は挙げざるなり 岡崎に在り。志操益堅くして日に賊兵と戦ふ。大久保忠勝、其の族三十六人と堡を上和田に築き土呂・針崎の賊と戦ふ。松平三蔵 松栄紀事松平作松井。按ずるに、此の時松井三蔵は無し。本書十二年、両旗頭を定むる条、西参河に松平三蔵有り。今此に拠り之を訂す。徳川歴代、松平三左衛門忠倫の弟、三蔵忠就有り。然れども賊に党す。乱平らぎ、肥後に流寓す。此と自異 寨を築き佐崎の賊を禦(ふせ)ぐ。小栗大六、其の宗族と筒針の

寨を守り数(しばしば)賊と戦ふ。土呂・針崎、岡崎と相近しと雖へども上和田堡其の中間に在り。故に賊岡崎を犯する能はず。家忠日記・松栄紀事並云、大久保忠俊、築堡上和田。徳川歴代曰、忠勝居宅在上和田。一説為忠俊居宅非也。今従之賊の至る毎に忠勝海螺を鳴らす。神祖、之を聞き亦之を馳せ救ふ。賊懼れて退く。三河物語・代代記・徳川記是に先んじ成瀬藤蔵正義藤左衛門正頼子。正頼母（ママ）、林藤助・八国府甚六等合謀納廣忠公於岡崎城六人之一也僚友と忿争し之を撃ち殺す。罪を懼れ遠州に逃ぐ。是に至り乱を聞き、妻子を挈(たずさ)へ岡崎に来帰す。其の罪を赦されんことを請ふ。神祖、其の志を嘉び之を宥(ゆる)す。正義戦ふ毎に群を挺(ぬ)く。成瀬系図夏目二郎左衛門吉信九郎左衛門吉久子・大沢(津)半左衛門・乙部八兵衛、野羽の故墨に拠り賊に党(くみ)し邑里を鈔掠す。按ずるに、上文、大津半左衛門、本證寺に拠る。（蓋しカ）其後(夏)憂目吉信に党し野羽の故墨に拠るなり松平伊忠屢(しばしば)之を攻め利有りと雖へども敵兵固く守り屈せず。八兵衛竊(ひそか)に納款(のうかん)（内通）し伊忠の兵を導き城に入る。故に城兵拒(ふせ)ぐを得ず。半左衛門僅かに脱し針崎に入る。伊忠之を急攻す。吉信、窘(きん)迫し（逃げ場を失い）

倉庫に匿(かく)る。之を就獲し、伊忠使を岡崎に馳せ、野羽の故墨を陥し城将夏目吉信を擒(とら)ふるの状を上ぐ。神祖、報(かえし)（返事）して曰はく、吉信は参州の豪士なりと。伊忠、不日(ひならず)して墨を抜き将を擒ふ。其の功偉なるかな。初め八兵衛、吉信と睦を交はす。故に之に党す。是に至り伊忠に謂ひて曰はく「吾野羽の故墨の守り難きを知る。吉信の命を講（話し合う）せんが為に帰降し之を生かすを願ふ」と。伊忠、其の志に感じ吉信及び八兵衛を講釈す。神祖、之を聴き二人を伊忠に賜ふ。家忠日記・徳川歴代・松栄紀事 本多廣孝守る所の土井城は子(于カ)敵境に介す（はさまる）。争戦累日。又東條城を攻め功有り。神祖、書を賜ひ之を褒む。廣孝、浄土真宗に非ざるを以て敵に党するの嫌(うたがい)無し。然るに当に是の時、其の宗門に非ざる者も亦間に乗じ釁(すき)を伺ひ、多く寇讐を為す。故に廣孝、長子彦二郎を岡崎に差(つかわ)し其の無弐を輸(つく)す。神祖、之を嘉び名を彦二郎に賜ひ康重と曰ふ。松栄紀事、康重襲称豊後守 戸田忠次、賊に党し野寺に在り。諸書上文並云、戸田光次拠上宮寺。並此時叛乱無常出此入彼自佐崎本野寺也 神祖、佼（懐

柔する人）を遣し諭して曰はく「汝彼の宗門に非ず。盍ぞ蚤に帰順せざる」と。忠次、即ち野寺の外郭に放火して岡崎に来たりて神祖に告げて曰はく「臣、野寺の形勢を知る。願はくは兵を発し之を撃て。臣請ふ、先登たらん」と。神祖、酒井忠次と戸田忠次とをして野寺を襲はしむ。賊、之を聞き城門を改修し我兵をして錯誤せしむ。戸田忠次之を覚らず、夜城門に抵り吾兵を導かんと欲し迷ひて入るを得ず。酒井忠次怒り帰らんと欲す。戸田忠次、更に之を道びき後門より入る。第一柵を攻め破り進攻す。第一柵の城兵、戸田忠次の声を知る。銃を発し其の首鎧に中り、忠次仆る。酒井忠次、兵を引きて還る。戸田忠次、亦死に至らず。神祖、之を褒め短刀を賜ふ。家忠日記・松栄紀事 松平信一、土呂・針崎の賊と闘ふ。鳥銃左股に中りて仆る。敵大訇（大声でわめく）自誇す。信一忽ち起ち叱りて曰はく「汝何を為さんや。我豈に汝が為に容易に死なんや」と。敵、懼れて退く。神祖、其の勇敢を歎ず。藤井松平家譜・鵞峯文集・藤井家記功碑・松栄紀事 石川家成・箇井与右衛門、其の宗門たり

と雖へども僧徒に与せず忠を尽くし力戦す。故に其の宗族亦皆志を悛め麾下に属す。松栄紀事　水野藤十郎忠重右衛門大夫忠政第六子、後更称總兵衛、為和泉守　兄信元と睦まず。鷲塚に避け居る。乱の起くるを聞き水野太郎作・村越又四郎と岡崎に来たり謁す。神祖、戦功を励ます。家忠日記・松栄紀事　高力清長の采地高力邑は土呂と相接す。賊其の邑を寇め、清長帰り之を撃つ。其の余杉浦勝吉・倉橋宗三郎・青山藤八郎・本多信俊・加藤勘右衛門正次・渥美太郎兵衛友勝・大岡忠右衛門忠勝　松栄紀事作忠四郎。按ずるに、忠勝の子孫忠四郎と称す。而るに忠勝、忠右衛門と称す。諸士伝略曰はく、忠勝、佐守の賊と闘ひ福王忠右衛門を斬る。福三（王）勇兵なり。神祖之を褒む。蓋し此時在るなり。今此に拠り之を訂す・榊原忠政・細井喜八郎勝久等各戦功有り。松栄紀事。諸士伝略に拠れば勝久、喜三郎勝明の弟（第）二子、金兵衛と更へ称す。今川氏眞の将鵜殿藤太郎長照長持子　参州上郷城に拠り、松平清善、兵を提げ之を攻む。松平清善、徳川歴代、備後守清宗と作す。曰はく鵜殿某の妻藤太郎を生み、出され再び清善に嫁し清宗を生む。異父同母兄弟にして藤太郎は其の兄なり。家忠日記曰はく、清善と藤太郎と異父同母兄弟たり。按ずるに、

竹谷松平系図と家忠日記と合ふ。松栄紀事・諸士伝略亦清善と作す。今之に従ふ　迭(たがい)に勝ち負け有り。既にして清善の兵敗る。神祖、出師し之を援く。名取山に屯し甲賀諜者をして城を襲はしむ。敵兵惟(た)だ擾(さわ)ぐ。虚に乗じ之を急攻す。城兵支ふる能はず。長照及び弟藤助戦死し城遂に陥つ。神祖、貳兵(兵を戴きカ)岡崎に還る。家忠日記・徳川歴代・松栄紀事。按ずるに、四年三月松井忠次、長照及び弟藤三郎を擒へて世子と質を易ふ。藤助即ち藤三郎か。今考ずる所無し。

是の秋、神祖、名を家康と更ふ。元康は今川義元の命(なづ)くる所なり。今、氏眞と絶(た)つが故に改め為(つく)る。三河物語・徳川歴代。按ずるに、代々記、名を更ふるを以て三年と為す。徳川記、四年と為す。三遠平均記・松栄紀事、五年の春と為す。徳川歴代、五年の冬と為す。今、年譜・創業記・徳川家譜・家忠日記に従ふ。

十一月二十五日、針崎の賊、上和田堡を攻む。大久保忠勝、之を小豆阪に迎へ撃つ。家忠日記厚木阪と作す。徳川記・徳川歴代・松栄紀事並びて厚木阪と作す。年譜・三河物語小豆阪と作す。按ずるに、厚木・小豆国音相同じ、字訛り厚の字と作す。今、年譜・三河物語に従ふ　賊兵皆旧(もと)麾下に属する

精鋭の士なり。神祖、兵を将ゐ之を援く。阿倍忠政、渡辺守綱の腰を射中つ。藤花甚五郎・川田彦十郎・喜藤八大夫・阪部又六、皆忠政の矢に中る。渡辺源二郎、忠政を射る。守綱、矢を抜き槍を揮ひ大久保与一郎を擬る（はかさがしねらう）。与一郎退き城中に入る。植村家政、蜂屋半之丞と接戦す。黒田半平幾（ほとん）ど危し。大久保忠佐出で之を救ふ。其の余競進す。守綱・半之丞引き去る。衆皆格闘す。水野忠重、半之丞を追ひ、半之丞、之を顧み笑ふ。忠重、決せんと請ふ。半之丞、槍を提げて進む。其の勢甚だ猛し。忠重、躱（かわ）し避く。半之丞、呼びて曰はく「汝吾が敵に非ざるを知ると雖へども、豈に吾が刃を汚すに足らんや」と。神祖、馬を躍らせ之に逼る。半之丞仰ぎ見愕（おどろ）き眙（み）（まっすぐ見る）首を俛（ふ）し（垂れ）槍を収めて去る。松平金助直ちに前（すす）み詬（からかい）て曰はく「汝、盍（なん）ぞ反闘せざる」と。半之丞、揚言して曰はく「吾累世の主君を畏る。豈に汝を畏れんや」と。槍を揮ひ金助を刺殺し将に首を取らんとす。神祖、之を大叱す。半之丞恐怖して走る。平岩親吉、筧正重と接戦

し、正重、親吉の耳を射中て将に仆さんとす。正重進み之を撃たんと欲す。神祖、又之を叱す。正重亦懼(おそ)れて走る。

二十七日、大久保忠勝の族、伊田邑に屯し正満寺の賊を攻む。本多正信の弟三弥正重、大久保忠世と互に鳥銃を以て相争ふ。忠世光(ママ)放す。正重傷つきて退く。戦闘経日（一日経って）輟(や)まず。賊徒相与(とも)に謀りて曰はく「此地に戦ひ終に志を得難し。宜しく兵を分け二に為すべし。一隊は大久保の族と戦ひ、一隊は妙国寺に陣し上和田の帰路を邀(むかえう)たん。敵の引き去るに及び前後夾撃すれば則ち彼泥淖(でいどう)（どろぬま）に陥ち一夫として脱するを得ず。此必ず之を破る策なり」と。議既に定まる。蜂屋半之丞、大久保忠俊の女婿なり。其の金軍の覆没（ひどく負ける）せんことを憫み、故無く馬を妙国寺辺に盤(まわ)し（丸く円をえがく）往きて復た反る。忠勝、其の意を悟り兵を引き上和田に還る。年譜・創業記・三河物語・家忠日記・徳川記・徳川歴代・松栄紀事

是の月、馬場小平太・石川新七郎・矢田作十郎、上宮寺を出で我兵と作岡・大平

に戦ふ。天野康景、隊長小平太を撃ち之を殺す。敵兵退走す。是に先んじ本多廣孝・松井忠次、東條城を攻め数（しばしば）吉良義諦と戦ひ之を破る。

閏十二月、神祖、廣孝・忠次の功を賞め各食邑を増し忠次に松平氏を賜ふ。家忠日記・松栄紀事

（永禄）七年甲子正月三日、神祖、砦を佐崎に築き勦（そう）（ほろぼす）戦す。賊、作岡・大平の屋を焼き民之（これ）に嬈（さわ）ぐ。水野信元、刈屋より来たりて歳首を賀す。按ずるに、信元、神祖と舅甥たり。始め神祖、信長と兵を構ふるを以ての故に屢神祖と戦ふ。三年、信元の弟信近、岡部長殺（欄外に「教」の字アリ）の襲ふ所と為り戦死す。信元、緒川より移り刈屋に居る。四年、神祖、信長に与し平ぐ。故に今来たるか。神祖、煙の起つを見信元に謝し佐崎に馳せ向ふ。信元、帰去するに忍びず麾下の兵を率ゐ渡河地に至る。三河物語・松栄紀事 神祖、上和田の兵をして針崎の賊を禦（ふせ）がしめんと欲し大久保弥三郎忠正を以て郷導せしむ。忠正、三郎右衛門忠久養子、実忠俊子 過盗（ママ）木直ちに小豆阪に至る。城（賊カ）、作岡・大平より帰り神祖に覿面（てきめん）（まの当たりに見る）

す。近藤新一郎、箭を放ち神祖の轡(くつわ)に中る。神祖、大いに怒り直ちに賊軍を衝く。水野忠重、隊長石川新七郎を斬り、水野太郎作、青見藤六郎を斬り各首級を獲る。

創業記・家忠日記・松栄紀事、青見或作大見。国音相通。松栄紀事曰、我兵佐馳甚五郎、与敵戦死。拠家忠日記・徳川歴代、甚五郎賊党也。在上文、紀事誤矣。賊兵波切孫七郎、走(に)げ大善阪に至る。神祖、親(みずか)ら槍を揮ひ之を捘(つ)くこと二(ふたたび)。孫七郎僅かに（やっとのことで）脱去す。神祖、軍を斂(あつ)め岡崎に還る。家忠日記係去年十一月。今従年譜・創業記・松栄紀事。按ずるに、徳川歴代、五年に係くるは誤り。

説見下

十一日、土呂・針崎・野寺の賊兵合はせ一軍と為(な)り上和田の寨を攻む。大久保忠勝の族堅守し之を拒ぐ。忠勝・忠世並びて創(きず)せらる。創業記・徳川記・家忠日記・松栄紀事。

徳川歴代曰はく、一説に六年正月と作す。謀其説是なり。然るに歴代、九月より菅沼定顕糧を督(うなが)し僧徒乱を作し十一月小豆阪の戦に至る。皆五年事と為す。然れば則ち一向一揆の乱、前後三年に渉りて六年は戦陣無し。大久保浄玄謂ふ所の、「去年以来日々争戦する旨」は亦合はず。其の誤りは明らかなり。鵞峯文集に深溝本光寺の碑亦た五年に係る。

蓋(けだ)し家伝の謬を承(うけつ)ぐなり。藤井松平紀の功碑六年に係る、是と為す。土屋甚内・筒井甚六等十余輩、馳せ郭外に戦ふ。城兵、機に乗じ出で闘ふ。敵兵披靡(ひび)（おそれひれ伏）す。針崎の賊、之を見正満寺を出で接戦す。神祖、之を聞き単騎来たり救ふ。唯だ宇都与五郎一人のみ焉(これ)に従ふ。筧重忠・内藤信成・垣村家政等三十八人相踵(しょう)して（あいっいで）至る。敵兵の矢炮雨と下(ふ)る。吾軍死傷を顧みずして戦ふ。年譜附尾 中根喜蔵、渡辺守綱と槍を接し傷せらる。喜蔵、槍を棄て刀を抜き守綱と闘ひ又傷つく。鵜殿八郎三郎康定撃ち守綱を傷つく。徳川記・家忠日記・松栄紀事・年譜附尾、皆十郎三郎と作す。徳川歴代日は く、此時十郎三郎既に死したり。其子八郎三郎なり。一説に十郎三郎と為すは誤り。按ずるに、松平系図、十郎三郎康孝、鵜殿と称し蔵人信孝の弟なり。天文中死し、信孝其を奪ふなり。故に岡崎の老臣、信孝を逐ふ。歴代の説は是なり。今之に従ふ。名康定、松平系図に拠る。守綱の父高綱来り救ふ。守綱、康定を撃ち之を殺す。高綱、直ちに神祖に向ひて前(すす)む。内藤正成其の甥なり。儕輩(せいはい)（仲間）に謂ひて曰はく「源五左衛門は舅(おじ)なり。然れども今日の事豈に私親を顧みんや」と。弓を彎(ひ)き

之を射る。矢両股を貫きて仆る。守綱之を負ひ去る。神祖、正成の忠勇を称ふ。松栄紀事曰はく、内藤四郎左衛門正成、源五左衛門を射る。石川十郎左衛門槍を執り神祖を擬ふ。正成又之を射る。正成十郎左衛門の甥なりと。年譜曰はく、内藤正成、渡辺源五左衛門・石川十郎左衛門二人を射、之を殺す。十郎左衛門、正成の舅なりと。蓋し松栄紀事、此の文に拠るなり。徳川記・家忠日記・徳川歴代・年譜附尾、皆内藤甚一郎、源五左衛門を射ると書く。而して十郎左衛門を射る事無し。諸書皆（ママ）法甚一郎、源五左衛門の甥なりと。寛永系図に拠れば四郎左衛門正成、初め甚一郎と称す。然れば則ち一人にして二事に非ず。今上の諸書に従ひ定めて一事と為す。

敵兵の衝突止まず。神祖、甚だ危ふし。賊兵土屋長吉重治其の徒に謂ひて曰はく「吾、門徒たるを以て主君に敵し今其の危を見る。豈に之に乗ずるに忍びんや。地獄に堕ち在ること固より欲する所なり」と。身を挺し来降し鋒を倒し神祖の馬前に戦死す。神祖、之を義とす。日既に暮れ、両軍引き去る。神祖、甲を卸し鉛二を得たり。鳥銃に中ると雖も甲堅く穿す能はず。其の危ふきこと此に至れり。神祖、石川家成をして土屋重治の屍を覓めしめ、之を得、上和田に葬る。創業記・家

忠日記・徳川記・松栄紀事・年譜附尾

二十五日、深溝九八郎・青山虎之助密かに神祖に啓(もう)して曰はく「臣等当(まさ)に佐崎寺中に入り、其の営を焼くべし。公、兵を勒(ろく)し（兵を整える）寺を攻むれば則ち必ず大捷(たいしょう)せん」と。神祖、之を聴く。二人夜潜かに寺に入る。賊之を覚り二人を撃ち殺す。時の人以為(おもえら)く其の志壮たりと雖も内応する者無し。事故(ゆえ)に成らずと。家忠日記・松栄紀事・年譜附尾

二月、酒井正親、西尾城を発し桜井・小川・野寺に至り火を縦(はな)ち聚落を焼く。西野に出で援兵を水野信元に乞ふ。進み八面に至り野寺を攻む。賊砦を出で拒戦す。正親伴(いつわ)り走(に)げ、敵、之を急追す。正親還り戦ひ之を破り隊長馬場平太夫を斬る。鷲塚の賊、援軍を邀(よう)撃す。信元の兵、之を撃破す。勝に乗じ寺門を入り隊長鈴木弥兵衛を斬る。捷(かち)を岡崎に告げ首級を上(たてまつ)る。神祖、正親の功を褒む。徳川記・松栄紀事・年譜附尾

十三日、神祖、石川又四郎・根来十内・布施孫左衛門等二十五騎をして針崎の形勢を詗はしむ。之を告ぐる者有り。賊、兵を針崎の外郭に伏す。候騎（斥候の騎兵）過ぐるに及び伏（兵）起ち之を邀つ。蜂屋半之丞・筧正重・渡辺守綱等兵を督め疾戦す（激しく戦う）。十内戦死す。又四郎・孫左衛門創せられて退く。年譜・徳川記・家忠日記・松栄紀事

是の月、佐崎の賊三百余人、矢田作十郎を以て将と為し岡崎を犯す。神祖、兵を将ゐ之を拒ぐ。銃卒に命じて曰はく「吾数賊の窘しむ所と為る（賊に苦しめられる）。皆作十郎の為す所なり。彼拳勇を恃む。前駆を為す毎に汝等注目し之を撃て」と。作十郎、果して衆に先んじて進む。卒、銃を放ち之を斃す。賊、其の死を見、魂褫気懾（たまげおじけづく）復びは戦ふ能はず。其の首を抱きて敗走す。年譜・創業記・徳川記・松栄紀事

作十郎の死より賊徒の凶焔日に衰へ皆前非を悔い復びは闘ふ志無し。蜂屋半之丞、其の幾を察し大久保忠正に就き、其の罪を赦されんと請ふ。家忠日記・徳川

記・年譜附尾及松栄紀事、一説に並びに云ふ、「吉田太左衛門、門徒に非ずと雖も本多正信・正重の誇る所と為り賊に与し、土呂寺中に在り。麾下の士斉藤某は其親友なり。書を太左衛門に貽(おく)り帰正を勧めて曰はく「当に本多・蜂屋をして罪を謝し降を乞はしむべし。公、心に之を赦す」と。太左衛門之を然りとし正信・正重に勧む。大久保忠勝姻戚たるを以て亦蜂屋半之丞に勧め降らしむ。半之丞之に従ふ。忠正に就き降を請ふ」と。附し以て攷に備ふ

忠正、従父兄忠勝と岡崎に抵(いた)り、神祖に言ひて曰はく「方(まさ)に今群雄割拠し天下大乱なり。大、小を并せ、彊、弱を凌ぐ。務めて土地を辟(ひら)き疆圉(きょうい)を恢(ひろ)げんと欲す。而(しか)るに譜第旧臣、君臣の義を知らず。此に党するは乱賊たり。半ば寇讐たり（攻撃する敵）。当に此の時、隣敵弊に乗じ来侵すれば則ち邦必ず危ふきに阽(のぞ)まん。其の罪を釈(ゆる)し、戻りて之を帰順せしむるに如かず」と。神祖之を聴く。忠正退きて半之丞に告ぐ。即ち其の党と議し又忠正に就き請ひて曰はく「儻(も)し寛恕(じょ)を蒙らば則ち願ひ三つ有り。其の一は罪を赦し、采邑(さいゆう)を没する勿(な)かれ。其の二は僧徒の本寺を住持するは故(もと)の如くに。其の三は首悪の者を赦し、問ふ勿かれ」と。神祖之を聞きて曰はく「請

ふ所允(ゆる)すべし。但し首悪の者は赦すべからず」と。大久保浄玄、流涕し諫めて曰はく忠俊剃髪号浄玄。諸書或作常源「臣の一門、去年以来日々争戦し体を損なふを惜まず。或は命を隕(おと)し或は傷来す。公、其の忠義を念はば則ち願はくは、降沛宥以て臣の恩賞に易へよ。帰順の士をして前鋒と為さしめ、上野城を攻め、吉良・荒川を勦(ほろぼ)して西三河の地を略せば則ち彊(きょう)場(ママ)白広にして基業鞏(きょうこ)固たらん。臣、老憊(ろうはい)す（老い疲れた）と雖も竊(ひそ)かに公の以て遠大なるを期す」と。是に先んじ水野信元、亦た賊徒を赦さんことを請ふ。故に神祖其の諫に従ひ親(みずか)ら上和田浄衆院に至り徳川記作成就院。今従三河物語・松栄紀事・年譜附尾印章を僧徒に授け悉く之を釈(ゆる)す。石川家成を土呂寺に遣はし衆に諭して曰はく「水野下野守懇ろに赦宥を析(と)く。故に一(ひとまず)寛典により解釈し蕩滌(とうてき)（あらいきよめる）す」と。賊徒大いに喜び皆干戈(かんか)を投げて降る。年譜・創業記・家忠日記・徳川記・三河物語・松栄紀事輒(すなわ)ち従ふ。家成、針崎に赴き高須口より正満寺に入り小閣に放火す。賊徒煙に咽(む)せ狼狽す。家成、又之に諭す。賊皆帰順し歓声雷の如し。

三河物語、高須口より入り放火に及ぶを以て土呂寺と為す。今徳川記・年譜附尾に従ふ。但し徳川記、石川日向守家成、伯耆守と作すは誤り 乃ち松平家次の罪を赦し松平親光の食邑を没す。親光出奔す。賊魁鳥居四郎左衛門・渡辺義綱・渡辺源蔵・波切孫七郎・本多正信及び弟正重亡げ去る。後皆釈され麾下に在ること故の如し。徳川記・家忠日記・松栄紀事・徳川歴代・年譜附尾 神祖、土呂・針崎・佐崎・野寺の宗旨を易へんと欲す。僧徒哀訴す。固く凶悪の僧を逐ふ。有学の僧を置き糧食を頒給す。檀越大いに喜び闔境寧謐たり（領内は静まった）。徳川記・年譜附尾

臣按ずるに、釈氏の教（仏教）倫理を絶滅し君親を廃犯す。然して福田利益の説（供養が福徳を生むという考え方）、人世を皷盪す（ゆりうごかす）。皇朝之を崇び、講経修法、朝儀と同科なり。故に其の徒驕傲（おごりたかぶる）にして不法多く南都北嶺動ば神輿を舁き以て不平を訴ふるに至る。朝廷、兵を差し之を桿禦す（ふせぐ）。僧徒狃（狎れる）以て常と為し、鎧甲衣褶（袈裟）と為し刃槊（やいばと柄の長い鋒）経巻と為す。

未疏（停滞）の弊遂に仏有るを知りて君父有るを知らず、寺有るを知りて国衙有るを知らざるに至る。蓋し浄土真宗其の法最も簡捷（手軽ですばやい）にして茹葷（匂いの強い野菜を食べる）啖肉（肉食する）世俗に異ならず。愚夫庸流（普通の人）其の説に惑ひ易し。故に譜第勲旧の士、破戒亡頼の僧に党して歴世覆祷（天が万物をおおい育てる）の恩を忘る。冠履倒置し緇素帰を同くす（冠とはきもの、黒白僧俗がごちゃまぜになる）。四郊、墨多く烽燧（のろし）急を告ぐ。悖逆（主君にそむく）の甚しきこと此に至り已に極まれり。而して神祖戎馬の劇（ママ）赤未だ斯の時に過ぐる者有らず。設使駿甲二州の敵、釁に乗じ来侵せば則ち疆圉守られずして邦必ずや危ふし。幸にして良臣策を献じ、神祖諫を容る。兇賊面を革め（服従する）叛臣帰順す。当時鉤（なかま）を射、祛（そで）を斬るの士、皆策勲底績の臣（功績のある臣）たり。豈に神武大度（度量）の効（効）に非ざらんや。土屋重治、幡然（くるりとひるがえる）として過ちを改め奮ひて身を顧みず神祖の馬前に効死す（命を棄てる）。復の六四に曰はく（『易経』六十四卦のうちの上経三十卦総覧

のうち）「中行（中庸の行い）独り復す」と。重治焉有り。是に繇りて之を観るに、天理の、人心に存するは固り外に仮かず。而して赳々たる（たくましい）武夫、惜しむらくは邪説の汨（泊カ）所と為りて其の本心を喪ふなり。元亀中、本願寺光佐大阪城に拠り、長島の土寇相踵して起つ。織田信長公、之を攻め克つ能はず。将校多く斃る。皆武夫の、聖人の道有るを知らず、篤く其の教宇を信じ破るべからずして、水火を踏藉（ふみつける）し死生を顧みざるに由る。上の令する所より甚しき者有れば則ち釈教の害を為すは勝て言ふべきや。

神祖、兵を将ゐ東條城を攻む。城主吉良義諦降るを請ふ。神祖、其の再叛を以て許さず。義諦江州に出犇し佐々木承禎に依る。六角左京大夫義賢、弾正少弼定頼子、剃髪号承禎　其の後摂州芥川に戦死す。荒川頼持も亦た亡げ去り、歳を経て病死す。年譜・創業記・三河物語・家忠日記・徳川記・松栄紀事。家忠日記曰はく「六年十月、松平亀千代家忠、松井左近忠次と砦を幡豆郷に築き、東條城を攻め之を抜く。吉良義諦江州に奔る。東條城を家忠に賜ふ」と。按ずるに東條城陥ち義諦出奔するは

実に是年二月に在り。蓋し家忠出兵し東條を攻む。故に去年閏十二月、神祖、松井忠次の功を褒め食邑を増し、松平氏を賜ふ。城を抜き城を賜ふ。皆諸書載せざる所なり。家忠日記は誤りなり。故に取らず

酒井忠賀援を失ひ駿府に出奔す。神祖、水野三左衛門分長をして上野城を守らしむ。分長右衛門太夫忠政孫、藤二郎範方子、後称備後守。更弾正忠、仕水戸威公

西三河悉く平ぐ。徳川記・年譜附尾、松栄紀事曰はく「三月、神祖と今川氏真と戦ふ。後に長沢城、本多重次・内藤信成をして之を守らしむ」と。按ずるに、六年正月、松平伊忠をして長沢城を守らしむ。其の後陥没を見ず。且つは諸書載せざる所錯誤有るを疑ふ。故にとらず

四月、小笠原新九郎康元後称摂津守。諸書或作安元。諸士伝略作康元、曰父名闕。従今之

初めて神祖に謁し麾下に属さんことを請ふ。神祖、之を賞し幡豆の旧邑を賜ふ。家忠日記・松栄紀事

五月、今川氏真の部将小原資良、将士の質を収め三河を略さんと欲す。将士皆神祖に属し其の指麾を受けず。二連木城主戸田主殿助重貞弾正少弼康元孫、丹波守某子。松栄紀事重貞作伊忠。蓋以与松平主殿助同称誤。今従諸士伝略

寨を三所に築きて納款(のうかん)す（内通する）。**神祖、**

鵜殿八郎三郎をして喜見寺の寨を守らしむ。按ずるに、八郎三郎康定、本年五月針崎に戦死す。蓋し其の子か。未詳　小笠原康元糟塚の寨を守る。年譜・徳川記・松栄紀事　重貞の母、質として吉田城に在り。重貞謀り之を出さんと欲し、伴りて資良と欵狎（うちとけて親しむ）し、数城に入り双六す。重貞の家士野々山某、殽饌（料理）を匱に盛り擔夫をして舁かしむ。城下に至り蓋を撤る。亦た門者に曰はく「主殿助、博賭を為し、酒食を設く。此の時以て母の汚衣を取り帰りて澣濯（洗いすすぐ）せんと欲す。請ふ怪しむ勿かれ」と。門者諾す。重貞と資良と博ちて酣飲す。野々山某、間を伺ひ母を匱中に納め衣物を以て蒙ふ。門者、之を怪しまず。輒ち過ぐるを得。重貞の騎士、中路に迎へ護衛して還る。重貞、別を資良に告げ纔に（やっとのことで）門を出づ。火を城下に縦ち二連木城に馳せ帰る。神祖、其の約有るを以て御油駅に出屯し、煙の起つを見る。下地邑に至り重貞来謁す。神祖、其の謀略を称め采邑を増加す。資良、二連木城を連攻す。重貞戦死す。神祖、重貞の忠を喜び次子甚平を以て嗣と為す。

徳川記・家忠日記・松栄紀事・年譜附尾、甚平、後称弾正。按ずるに、松栄紀事、重貞戦死し其の父丹波守致仕し猶存す。神祖、丹波守に命じ甚平を以て嗣と為すと。諸士伝略に拠れば丹波守即ち甚五郎にして神祖を潮見阪に於て奪ひし者なり。三年五月二十一日死す。故に今取らず。又按ずるに、徳川歴代、主殿助を以て丹波守康長と為す。諸士伝略を孝（考）ずるに康長、甚平の子なり、五年を以て生まる。此の時僅かに三歳なり。歴代誤れり 神祖、兵を発し野田・牛窪の寨を攻め進み吉田城を過ぐ。本多忠勝時に年十七、敵兵牧野宗二郎と槍を接す。

是の日第一の槍なり。牧野宗二郎、松栄紀事、城所助之丞と作す。或は宗二郎と云ふ。今年譜・家忠日記・三河物語・徳川記に従ふ 蜂屋半之丞第二の槍たるを恥ぢ、槍を捨て刀を抜き敵二人を斬る。河井正徳、鳥銃を放ち之を斃す。従者走り其の母に告ぐ。母曰はく「我子怯（ひる）むか」と。曰はく「勇を奮ひて死す」と。母曰はく「戦場に死するは固（もと）より士の常なり。若（も）し我子怯懦（きょうだ）にして人の諦（あき）らかにする所と為（な）らば則ち生くると雖も死命に如かず。我憾ずる所無し」と。時の人之を称ふ。三河物語・代々記・松栄紀事 戸田吉兵衛

氏光（孫右衛門氏輝子）其の母質と為（な）り吉田城に在り。氏光、之を顧みずして力戦し忠を尽くす。（松栄紀事）松平清宗苦戦し創（きず）せらる。加藤勘右衛門正次・成瀬正義・犬塚作内、或は首級を獲り或は敵兵を射殺し各功有り。（家忠日記・松栄紀事）然るに城兵力を悉（つく）し拒（ふせ）ぎ闘ふ。我軍利ならずして岡崎に還る。（徳川記）

臣按ずるに、戸田氏光、左門一西の父なり。其の母を顧みずして功名を覬望（きぼう）す。記する者、之を忠を尽くすと謂ふ。夫れ忠臣を求むるに必ず孝子の門に於てす。果たして能く忠ならんや。上は既に徐庶（三国時代蜀の人、諸葛亮の親友、初め劉備に仕え、のち魏の曹操に仕えた）に及ぶ能はず。下は亦た戸田重貞に媿づるもの多し。

小原資良、寨を佐脇八幡に築き、三浦左馬助をして之を守らしめ、（按ずるに、五年九月、赤坂の捷、佐脇八幡皆岡崎に属す。蓋し其の後資良、鈔略（かすめ取る）し又之を得るなり。又按ずるに徳川記、板倉弾正・板倉主水、左馬助と同じく守ると。然るに弾正・主水、五年九月戦死す。上文に見ゆ。故に取らず。）以て吉田・牛窪二城の蕃（藩）屏（守り垣）と為（な）す。神祖、本多信俊をして兵六百を将る一宮の

寨を守らしむ。今川氏真、兵一万余を将ゐ以て吉田を援く。五千余を分け一宮を圍む。自ら五千余を将ゐ佐脇八幡に屯す。信俊、援を岡崎に乞ふ。神祖の将三原なり。氏真其の隊伍の厳整なるを見、畏縮し敢へて出兵せず。神祖直ちに進み一宮に至り氏真と決戦せんと欲す。敵、其の精鋭を避け圍を解き牛窪に退く。信俊、城を出て尾撃（＝追撃）す。敵兵敗走す。

其の夜、神祖一宮寨に陣す。遠州引間城主飯尾豊前諸書引間は浜松と作す。按ずるに、八年十二月、豊前、神祖に降り其の後、神祖、引間を改め浜松と曰ふ。故に今旧称に従ふ。下効之 氏真の営に在り。竊かに神祖に通款（内通）し、疾と称し夜引間に帰る。新井・白須賀を過ぐるに及び火を縱（はな）ち駅舎を焼く。氏真大いに駭（おどろ）く。年譜・創業記・家忠日記・徳川記。松栄紀事曰はく「五年四月豊前、氏真に叛き神祖に属す。氏真怒り新野左馬を以て将と為し之を攻めしむ。城兵戦ひ敗れ城陥ち左馬亦戦死す」と。按ずるに、豊前、引間を以て叛き今年に実在す。而して五年四月の戦、諸書載せざる所なり。紀事は誤りなり

翌日、神祖旆(はた)を反(かえ)し又氏真の営を過ぐ。其の鋒甚だ鋭なり。氏真竟(つい)に戦ふ能はず、兵を引きて帰る。世に之を一宮後詰と謂ふ。年譜・創業紀・三河物語・家忠日記・徳川記・徳川歴代。按ずるに、三遠平均記、十一年に係くるは誤りなり。諸書之を称して「一宮退口（のきぐち）」と曰ふ。今按ずるに、氏真に在れば則ち退兵なり。神祖に在れば則ち援軍なり。称め謂ふは当らず。家忠日記後詰と書き曰ふは是なり。今従ふなり

六月、神祖、兵を将ゐ吉田城を攻む。酒井忠次前鋒を為す。小原資良堅く守ると雖も孤(孤)立無援(援)なり。勢日(ひ)に窮蹙(きゅうしゅく)す（きわまり縮まる）。忠次、本多彦八郎忠次をして助太夫忠俊子和親を議せしむ。資良之に従ひ質を乞ふ。神祖、之を許し、異父弟松平康俊及び酒井忠次の女を以て質と為(な)す。忠次女、後嫁松平外記伊昌資良、大いに喜び質を携へ駿府に還る。神祖、吉田城を忠次に賜ひ東三河の事を判ぜしむ。年譜・創業記・家忠日記・徳川記・松栄紀事。小原資良即肥前也。年譜、作備前誤今川氏真、朝比奈肥後をして田原城に拠らしむ。按ずるに、田原城旧戸田氏の拠る所なり。主殿助重貞に至り二連木城主と為る。未だ田原の、何時

氏真に属するかを知らざるなり 神祖、本多廣孝をして寨を梶邑に築かしめ之を攻む。戸田忠次、敵の圍む所と為り幾(ほとん)ど危し。戸田九右衛門勝則、馳せ至り敵兵を射殺し以て之を救ふ。戸田七内光定、亦た敵を射之を却(しりぞ)く。廣孝進み戦ひ外郭を攻め破る。肥後、力屈し城を致して（返上する）去る。神祖、廣孝の功を賞め田原城を賜ひ采邑を増加す。徳川記・年譜附尾並び云ふ、田原城主戸田吉兵衛、降を乞ひ城を致す。神祖、城を廣孝に賜ふと。諸国城主記に拠れば田原城、明応年十（ママ）戸田宗光の築く所にして子孫世（よよ＝代々）之に居す。戸田吉兵衛氏光別れ一家を為す。是に先んじ已に神祖に属す。但し、田原城主に非ず。二書誤り。今家忠日記・松栄紀事に従ふ

是の歳、神祖、兵を将る御油城を攻む。守将本書名闕 善く射る者をして高きに乗り雨射せしむ。我兵進むを得ず。神祖、内藤正成に命じ射せしむ。正成三箭を放ち其の二箭楼櫓に入る。内藤四郎左衛門の七字を守茄(干笥カ＝やがら)（矢の幹）に鐫(きざ)む。敵其の箭を還す。諸(これ)又一箭を放つ。神祖、之を埖(と)めて曰はく「敵必ず密謀有り。汝射る勿れ」と。正成命に従はず隊を出で将に射んとす。敵兵、盾を路側に擁し将に其の

進むを候ひ之を鏦かんとす。正成、箭を放ち盾を穿ち直に其の甲を洞き之を殺す。城兵大いに駭き退き走ぐ。神祖、其の射芸を美む。松栄紀事

八年乙丑春、東参河の将士、今川氏真の衆を馭するに足らざるを知り多く神祖に属す。牛窪城主牧野右馬允成定先づ降る。西郡（西郷カ）清員・菅沼定盈、野田に在り。白井某下條に在り。故に長篠・作手・段嶺の将士、此の三人に就き相踵し降附す。長篠・作手・段嶺、之を山家三方と謂ふ。参河悉く平ぐ。年譜・家忠日記・松栄紀事。松栄紀事曰はく「設楽某妻子を挈へ衆に先んじ岡崎に来謁す。神祖、之を喜ぶ」と。按ずるに、設楽甚三郎、是に先んじ既に神祖に属す。上文に在り。故に取らず。

三月、本多重次・高力清長・天野康景を以て奉行と為し訟を聴き事を決せしむ。世に三河三奉行と称す。徳川記、作七年誤。三遠平均記、無本多重次而有植村荘右衛門。今従年譜・家忠日記・松栄紀事

重次彊毅にして好く罵る。時の人、鬼作左と称す。清長、和煦（あたたかい）にして慈愛あり。人最も親しみ易く仏高力と称す。康景、沈重にして謀慮多

く輒ち可否せず。左右無辺（判断に際限がない）天野三兵と称す。甲陽軍鑑・松栄紀事。諸士伝略曰はく「六年一向宗、乱を作す。高力清長、高力邑に還り賊を討ち乱を平ぐ。法制を定め神仏像・経巻を修む。故に邑人称して仏高力と曰ふ」と。此又一説なり。

臣按ずるに、鄭（中国春秋時代の国）の子産、政を為すや、猛以て寛を済し（うまく調整する）鄭国善く治まる。唐の太宗、相を置く。房玄齢善く謀り、杜如悔（創業の名臣、房玄齢とともに貞観の治を行った）能く断ず。訖く能く貞観の治を致す。神祖、三河を得、始めて奉行を置く。剛柔相済ひ寛猛兼ね施す。規模の大なる、以て推すべくして天下に及べり。天野康景幼くして神祖に従ひ駿府に往き長じて獲を斬るの功有り。剛直明決、其の興国寺城を去るを観るに知るべし。豈に依違（はっきりしない）両可（決められない）操決する所無く五代馮道（五代の政治家、乱世に五朝十一帝に宰相として仕えた。後世無節操として批判された）の如き者ならんや。神祖の、人を用ゐるは蓋し深意有らん。

十二月、今川氏真、飯尾豊前の貳(ふたごころ)有るを怒り、駿府に召し之を殺す。豊前の家臣、江馬安芸・江馬加賀、固く引間城を守り岡崎に属す。神祖、豊前の采邑を賜ひ之を綏撫(すいぶ)す（いたわり安心させる）。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

是の歳、戸田忠次の采地を参州大津邑に賜ふ。家忠日記 神祖、師（軍隊）を帥(ひき)ゐ寺部城を攻む。野野山藤兵衛元政先登す。城主鈴木日向守大敗し、城を棄て其の采邑の家並に遁る。其の子監物と駿府に奔(はし)り氏真に属す。家忠日記・松栄紀事。按ずるに、寺部城主鈴木日向守、永禄元年、出降す。上文に見ゆ。蓋し其の後又叛くなり。然して諸書載せざる所未詳 酒井忠賀、岡崎の世臣浄賢の嫡子にして忠次の姪(おい)なり。天文年中廣忠公に叛き、松平内膳正清定に降る。内膳信定子、監物家次父 頻年(ひんねん)（ひきつづいて）浄土真宗の賊に党し、又叛く。神祖、然るに其の罪を赦し問はず。忠賀の兇悪猶ほ悛(あらた)めず、また上野城に拠り叛く。年譜・松栄紀事並び云ふ「将監、岡崎を去り上野に拠る」と。按ずるに、七年春、一向一揆の乱平ぐ。忠賀駿府を出奔す。蓋し駿府より潜かに来て上野に拠るなり。二書疑ふらくは誤り有り。年譜附尾、「神祖、忠賀をして駿府に置く

所の質子を棄てしむ」の語を以て、此の時の事と為す。益(ますます)誤りなり。神祖、大いに怒り忠次及び本多廣孝をして之を攻めしむ。内藤信成、時に十七歳、進み城門に逼り敵兵を斬る。阪部造酒丞・今井彦兵衛勝長の射殺する敵兵頗(すこぶ)る多し。阿倍忠政・大久保忠勝、矢を放ち奮戦す。城兵皆謂(おもえ)らく「其の乱臣に与(くみ)し永く汚名を受くるよりは、君に就き寛大の君に事(つか)へ(＝仕)以て功名を図らん」と。相率ゐて降る。忠賀、力弾(殫＝つきる)き又駿府に奔る　創業記・家忠日記・松栄紀事

九年丙寅五月、牧野成定卒す。其の子石(ママ)馬允康成嗣ぐ。其の族出羽守某采邑を争ふ。康成之を岡崎に訴ふ。其の辞直(すぐ)なり。神祖、書及び諱字を康成に賜ひ悉く旧邑を授く。水野信元をして出羽守を遂はしむ。家忠日記・松栄紀事、賜康成書載在古簡雑纂。按ずるに、是の時諱字名康成を賜はば則ち是に先んじ別に名有り。然れば諸書考ふる所無し

十二月二十九日、神祖、従五位下に叙せられ三河守と為る。年譜・創業記・公卿補任・家忠日記・松栄紀事。創業記曰はく「公、是より勅命を以て徳川氏に復す」と。按ずるに、神祖、未だ嘗て氏を改めず或

は松平氏と称せず。復と曰ふは誤りなり

是の歳、戸田忠次の族、兵右衛門・九右衛門・与五右衛門等に食邑を頒け給ひ、其の軍功を賞む。家忠日記・松栄紀事

十年丁卯五月二十七日、織田信長、其の宰佐久間信盛をして女を岡崎に送り世子に妻がしむ。年譜・創業記・信長譜・家忠日記・松栄紀事 是の月、二連木城主戸田弾正卒す。其の子虎千代尚ほ幼し。虎千代長而称孫六、任丹波守。名康長 神祖、伯父重貞の功を重んじ虎千代を以て嗣と為す。松平氏を授け其の舅戸田傳十郎をして代りて士衆を統めしむ。他姓の人に松平氏を賜ふこと是れ其の始めと為る。諸士伝略、傳十郎虎千代母之弟也

初め小原資良・小倉与助、皆江州人なりて今川義元に事ふ。資良の子三浦右衛門美しき姿容なり。氏真之を嬖す。右衛門、蹋歌（足を踏み鳴らして調子をとって歌うこと）を好み氏真に之を観るを勧む。氏真遂に之を好む。国を挙げ狂ふが如し。氏真奢侈にして武事を忘る。讒を信じ佞りを喜ぶ。将士怨嗟す。是に先んじ与助の子内蔵

助資久、武州川越城を援け功有り。北條氏康其の勇敢を称(ほ)む。氏真之を賞し十八人衆の隊長と為す。飯尾豊前の帰順するに及び、資良病みて行く能はず。右衛門代りて其の兵を将ゐ引間城を攻め、亦た功有り。氏真、益之を寵し小番衆の隊長と為す。資良、吉田城に在ること既に久し。父子其の武功を誇る。義元の旧臣三浦・朝比奈・葛山・斎藤・福島等二十余人、桶峡(間脱カ)の難に於いて死する能はずして駿府に逃げ帰る。皆之を羞ぢ門を杜(と)ぢ出でず。故に新進の用事・政柄(政権)自(おのずか)ら資良父子及び資久に帰す。旧臣之を嫉み多く携弐(けいじ)(仲たがい)を懐ふ。氏真の外祖武田左京太夫信虎(左京太夫信綱子)其の子信玄の遂(逐)ふ所と為(な)り駿府に在り。竊かに旧臣と駿府を奪ふを謀る。事露(あらわ)れ氏真大いに怒り信虎を逐ふ。信虎、京師に奔(に)げ、使を甲州に遣し信玄をして駿府を取らしむ。信玄以為(おもえ)らく「岡崎の武威日に盛んにして駿府の老将皆怨望す。駿遠二州必ず岡崎の有と為らん。坐(いながらに)して大敵を肘腋(ちゅうえき)(非常に近い所)に生むは計(よい考え)に非ざるなり」と。乃ち使を駿府に遣し、氏真を援

け以て岡崎を攻めんと欲すと告ぐ。氏真悦ばずして曰はく「彼豈に我を援けんや。是れ我に代らんと欲するなり。我豈に其の術中に堕ちんや」と。使復命す。信玄、之を聞きて曰はく「彼必ず国を失ふに久しからざらん。其の、他人をして之を得しむるよりは我自ら之を得るは曷若（いかん）（どうだろう）」と。遂に氏真無（と）（與）絶つ。山縣三郎兵衛昌景を岡崎に遣し好を神祖に通ず。遠州の界を定めて曰はく「大井河以西は岡崎に属し、以東の駿河に至るは我之を領す」と。神祖之を許す。家忠日記・三遠平均記・松栄紀事

十一年戊辰正月十一日、神祖、左京太夫と為る。創業記・公卿補任・家忠日記・松栄紀事

二月八日、左馬頭源義栄足利左馬頭義維子、義晴公姪征夷大将軍を拝す。将軍家譜

三月、大沢左衛門佐基胤の武将基胤治部太輔基相子尾藤主膳諸士伝略作彦四郎。蓋初称也・林山修理松栄紀事、村山、作山村曰。或作村山。今従年譜附尾・藤井松平系図遠州堀川城に拠る。神祖之を攻む。松平信一・榊原小平太康政七郎衛門長政子、後任式部太輔、為上野館林城主前鋒を為

す。康政、先登し創せらる。諸士伝略　大久保新十郎忠鄰大郎右衛門忠世子、後為相模守　年甫十六、敵を斬り首級を得。信一・康政、死傷を顧みず力を竭(つく)し奮闘す。城遂に陥つ。年譜・家忠日記・松栄紀事　神祖、師を班(かえ)し山本帯刀成行をして見付城を築かしむ。成行、其の地形を相(み)るに築城に宜しからず。故に神祖、引間を改めて浜松と曰ひ城郭を修築す。家忠日記・年譜附尾。林恕（林春斎）秦湘行記曰はく「浜松、本の名は引馬なり」と。其の東十余町浜松と号する処有り。神祖、引間を改めて浜松と曰ふ。故に彼の地旧浜松と号す。引馬、或は曳間と作す。引間と国音相同じ。徳川歴代曰はく「神祖、引間を諱(い)み（避け）浜松と改称す」と。按ずるに、引は引退の義有り。其れ或は然るなり。歴代又曰はく「帯刀、甲州人勘介の弟。名は頼重」と。今、松栄紀事に従ふ

是の月、神祖、宇津山城を攻む。守将小原資良　按ずるに七年、資良吉田城を去り駿府に還る。蓋し其の後宇津山城を守るなり　其の敵し難きを知り城を棄て去る。硝石を城中に瘞(うず)め前隊城に入るに及び消火（硝石の火）暴発し皆大いに驚く。然れども死傷者無し。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

四月、遠州二股城主二股左衛門・高數の浅原其（某）・頭陀寺の松下某等皆来降す。家忠日記・松栄紀事、頭陀、頭田に作す。松栄紀事下文頭陀寺有り。蓋し国音相通ず。今之に拠る 駿州久野（能）城主久能三郎右衛門宗能、今川氏真に叛き麾下に属す。家忠日記・松栄紀事

八月、織田信長、源義昭を大将軍として立てんと欲す。義昭、万松院義晴の第二子、光源院義輝の弟。事、宗都将軍家譜に詳かなり。按ずるに、鵞峯文集藤井家紀功碑十年に係く。蓋し家伝の繆を承るなり。信長譜十一年に係く。是と為す 使を江州観音寺城に遣し佐々木承禎に説かしむ。承禎従はず。其の子右衛門佐義弼と議し観音寺城を守る。兵を分け箕作・和田山等の城に拠る。

九月、信長岐阜を発し之を攻め、援兵を岡崎に乞ふ。神祖、松平信一をして兵二千余を将ゐ之を援けしむ。信長の別将木下藤吉郎秀吉 其父未詳。後称羽柴筑前守、賜姓豊臣。至関白従一位大政大臣 信一と与（とも）に箕作城を攻む。城堅く抜けず。信一先登し之を急攻す。大いに呼ばはりて曰はく「参州の援兵松平勘四郎信一、箕作城の先登を為（な）さん」

と。声遠近に響き、将士尽く之を聞く。三宅康貞進撃し首級を獲る。城兵支ふ能はず。守将建部善八郎出で走る。城遂に陥つ。信長、信一の勇敢なるを称(ほ)めて曰はく「汝は胆毛を生ずる者（胆に毛の生えた者）と謂ふべし」と。著(き)る所の桐紋革胴服を脱ぎ之を授く。年譜・信長譜・家忠日記・藤井家紀功碑・松栄紀事。但し信長譜、信一、信吉と作すは誤り。信吉、信一の養子。安房守なり。家忠日記・藤井松平家譜並び曰はく「信一世葵(よよ)を以て紋と為す。神祖と同じかるを憚り酢漿草を以て之に代へ、是より桐及び酢漿草を以て紋と為す 承禎・義弼、観音寺城を出で走り甲賀山を保つ。信長、兵を進め十八城を抜き、義昭を迎へ京師に入る。信一、従ひ行く。信長、令を下し軍士の寇鈔(こうしょう)（掠奪）を禁ず。信一の奴隷、織田上野介信包の卒と 信包、信長公弟、任上野介、至従三位、左近衛中将、式部大輔。剃髪号老大 故き烏帽を得、忿争し将に闘はんとす。美濃尾張の兵争ひ擐甲操兵（鎧を着武器を持ち）信一の旅寓を圍(かこ)む。痘(ママ)譟禁止すべからず（騒ぎは止められなかった）。信一の兵、将に銃矢を放ち之を禦がんとす。京師繹騒(えきそう)す（騒ぎがつづく）。信一部下を戒め指麾法有り。信長之を聞き大いに怒りて

曰はく「我、援を岡崎に乞ひて信一大功を立てり。汝等若し参州一人たりとも殺さば則ち我悉く汝輩を族滅（一族皆殺し）せん」と。乃ち尾濃の兵、事を首むる者を退け使を遣し篤く信一に謝せしむ。齎す処の鳥銃一口・黄金四鎰（金貨の重さの単位二十両）を贈る。事絞り、信一岡崎に還る。家忠日記・松栄紀事・徳川歴代

是の月、大将軍義栄病卒す。信長、左馬頭源義昭を京師に納む。

十月十八日、義昭、征夷大将軍を拝す。将軍家譜

十二月、武田信玄、将に駿州を攻めんとし甲州を発す。神祖、経界を遠州と為し大井河の上に出屯す。菅沼定盈及び其臣今泉四郎兵衛延傳を以て郷導と為し伊井谷を取らんと欲す。定盈曰はく「井伊谷は要害の地なり。同族二郎右衛門忠久・近藤石見守康用周防守忠用子、小字勘介・鈴木三郎大夫重吉は平左衛門重長の子。父子初め今川義元に属す。按ずるに、鈴木家譜、重吉重時と作す。松栄紀事重路と作す。今鈴木重好伝に従ふ井伊谷の豪なり。此の三人を召し采邑を頒ち給はば則ち戦はずして井伊谷を得。此れ上策なり」と。

神祖、之を善しとし進み井伊谷に至り印章采地及び誓書を賜ふ。皆麾下に属するなり。之を井伊谷三人衆と謂ふ。神祖の遠州を得るに其の功居多（大部分を占める）なり。年譜・家忠日記・松栄紀事

臣按ずるに、有為の主の、四方を経略する者、必ず州郡の豪傑に資し其の形勢を審かにし、然る後に疆を狗地に拓くを以て其の基業を□（挽カ）くを得るなり。漢の光武、耿弇（後漢の武将、建威大将）を得、以て北道主人（道案内）と為し漁陽上谷の兵を発す。乃ち能く王を破れば即ち赤眉を勦し竟に中興の大業を建つるなり。織田信長公、美濃の三士を得以て前駆と為す。稲葉伊与守義通・氏家常陸介入道卜全・安東伊賀守、世謂之美濃三人衆 乃ち能く斎藤竜興を逐ひ膏腴の地（豊かな地）を取る。以て浅井・朝倉を殄滅（滅ぼしつくす）して覇業を剏（＝創）建するを得るなり。神祖、井伊谷の三士を得以て郷導と為す。乃ち能く遠江の地を徇へ山河の固きに拠る。以て甲斐の咽喉を扼え数武田信玄と鋒を争ふを得。卒に能く勝頼を斃して駿河を取り、

根本の地を立て為すなり。是に繇りて之を観るに禍乱（世の乱れ）を戡定（平定）し基業を恢弘（ひろげる）するは必ず豪傑の士を藉る。而して菅沼定盈言聴計従（命令に従う）。神祖、竟に三士の力を得。君臣の際美と謂ふべし。

信玄、駿州に入り由比の側近松野に屯す。今川氏真出で清見寺に屯す。庵原安房を以て前鋒と為し薩埵山に拠り将に戦はんとす。氏真の将瀬名・朝比奈・三浦・葛山等皆信玄に通欵し営を抜け駿府に帰る。安房の兵寡く戦ふ能はず、氏真に駿府城に帰るを勧む。氏真諸将の離叛を知らず、召し軍事を議す。重臣朝比奈兵衛大夫先づ遁れ、其の余悉く叛き去る。氏真城を守る能はず二千余人を率ゐ土岐の山家に寓す。懸川城に入り朝比奈泰能に依る。年譜・家忠日記・代々記・三遠平均記・松栄紀事明年の春に至り、泰能善く氏真に事へ厚く士卒を犒ふ。創業記 是に先んじ氏真、岡部二郎右衛門正綱 美濃守常綱子 をして駿府の牙城を守らしめ、安部大蔵元真をして第二城を守らしむ 諸士伝略に拠る、元真、諏訪刑部信真の子、摂津守信盛の祖父なり。姓滋野。岡崎元老安

倍大蔵定吉と称同じくして人異なれり。安部、安倍既に混淆し易く、世人多く以為（おもえ）らく一人なりと。故に之を悉（つまびら）かにす 信玄、利を以て二人を誘ふ。正綱之に従ひ、元真聴かず。然るに勢孤なりて守る能はず。其の子弥一郎信勝と安部谷に退保す。信玄、伊川邑の民を購ひ元真父子を撃つ。元真戦ひ敗れ僅かに妻孥を率ゐ浜松に至り降る。神祖、兵を遣し之を援く。元真、再び山路を経、田代・河内二邑に至り土寇を撃ち之を却（しりぞ）く。神祖、之を褒む諸士伝略 信玄、兵を遣し府城を焼き久能山に屯す。氏真の将二十余人信玄に降る。信玄、質を徴め甲府に送る。氏真の臣三浦与二郎岡崎の質松平康俊及び酒井忠次の女（むすめ）を執り、之を信玄に致す。徳川歴代、与二郎、与市と作す。義高云はく「二質子を執り甲府に抵（いた）し之を信玄に献ず」と。按ずるに、此時信玄、久能山に屯し未だ甲府に帰らず。其の説憑拠（＝証拠）に足らず。今取らず。 信玄、大いに悦び甲府に幽す。兵を進め駿州を取らんと欲す。氏真の将由比・浅原・斎藤等並名闕 伊久見山に拠り、小原資良・其子三浦右衛門、堅く花沢城を守り之に拒ぐ。長谷川二郎右衛門、其の族二十一人と藤枝

城に拠る。故に信玄、輒ち駿府に入るを得ず。右衛門、氏真の寵を受け、義当(まさ)に死生たるべく之を以て懸川城に在り。而るに以て城主朝比奈泰能と相能(ゆる)さず。故に氏真と訣かれ花沢城に拠る。公を忘れ私に詢(したが)ふ。時の人之を譏(そし)る。家忠日記・松栄紀事

臣按ずるに、古より憸邪(悪)の小人、人邦家を誤る。必ず奢靡(しゃび)逸楽(ぜいたくで華やか)を以て其の君を蠱(たぶら)かし、然る後に己に其の欲する所を行ふを得るなり。三浦右衛門、竜陽(戦国期、王の愛臣)の選を以て柔曼(にゅうまん)(なよなよとした色香)の態を逞(たくまし)くし、武事を誇り以て世臣を蔑(いや)しむ。君寵に藉(よ)り以て政柄を握り讒諂壅蔽(ざんとうようへい)(偽りを告げ君主の耳をふさぐ)至らざる所無し。其の志、奢を窮め欲を極むるに過(あやま)たず。而して掊克(ほうこく)(おごり高ぶって人をやっつける)漁奪(民の所有物をむさぼり獲る)。駿遠二州の民、朘(サ)削(やせほそる)日に甚し。今川氏真、晏然(あんぜん)(のんびり)として以て良佐を得ると為す。彼の好む所我も亦た之を好む。彼の為す所我も亦た之を為す。父讎を忘れて報

ゆる能はず。将佐内叛して禁ずる能はず。舅氏（母方のおじ、又は妻の父）来侵して禦ぐ能はず。流離狼狽するに至り懸川城に遁るるに及ぶ。則ち右衛門、私嫌有るを以て其の行に従はず、花沢城を保ち自ら全計を為す。割袖の恩、果たして安くにか在る。豹虎に投げ畀ふるに豹虎食はず。百姓怨を振ふ。衣を褫ひ僇辱す（はずかしめる）。而して舅氏啻に渭陽の情（太公望の如く君に仕えること）無きのみならず封豕長蛇（大きな豚蛇＝欲深く残酷な人）たり。其の呑噬（侵略）を肆ぬるを以て城郭灰燼、紅稷丘墟（国土荒廃）、神祖の包荒の量（心が広く大きいこと）を頼み、氏真僅かに死を免かれて寓公たるを得。憸邪（悪）の、邦家を覆すこと、吁畏るべきかな。

神祖、懸川城を攻めんと欲し見付駅に屯す。兵を遣はし井伊谷を攻め之を抜く。菅沼忠久等を以て郷導と為す。刑部城に進攻しまた之を抜く。菅沼又左衛門をして之を守らしむ。菅沼定盈の功を賞め書を賜ひ食邑を紛ふ。（欄外に「給」あり）　家忠日記・松栄紀事

是の月、今川氏真引間城を攻め、江馬安芸・江馬加賀禦ぐ能はず。妻孥を以て質

と為し罪を謝し氏真に降る。加賀、神祖に密告して曰はく「氏真、飯尾豊前を戮(ころ)したるより猜疑輟(や)まず、引間を急攻す。故に已むを得ず降を乞ふ。紓(じょ)(ゆるやか)以て一朝の難(一大事)敢へて貳(ふたごころ)を懐(おも)ふに非らず。願はくは之を亮(たす)けよ」と。神祖之を聴く。加賀、之を安芸に告ぐ。安芸、以為(おもえら)く「我を売り己の為にす」と。深く之を憾み、遂に加賀を招き之を刺殺す。加賀の従士小野田彦右衛門、立ちどころに安芸を殺す。神祖、遠州安間頭陀寺に屯す。彦右衛門、价(かい)(兵士)を馳せ之を告ぐ。神祖、引間城に入り其の功を賞む。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事○徳川記・徳川歴代・年譜附尾並び曰はく「十年、飯尾豊前守殺され、其の妻引間城を守る」と。神祖、使を遣はし之を諭して曰はく「城を致(の)けば則ち当に豊前守の旧邑を給ふべし。家士をして流寓せしめず」と。妻、対へて曰はく「妾、婦女たりと雖も弓馬の家に生まる。城を致(の)きて去るは其の素懐(本望)に非らず」と。十二月二十四日、神祖、兵を遣はし之を攻む。利ならず。翊日(よくじつ)、外郭を攻め破り城兵の死者二百余人、我兵の戦死三百余人。妻擐甲(かんこう=鎧を着る)乱髪、眉尖刀を揮ひ侍女十七人を左右に列ね開門して出で縦横に突戦す。我が兵披靡し(おそれ逃げる)妻

と侍女と皆戦死す。神祖、之を惜しむ、其の事頗る偉然たりと。年譜正文・創業記・家忠日記・松栄紀事等の書皆其の事無し。豊前殺さるるは実は八年に在りて江馬・安芸・加賀、八年より是の年に至り引間城を守る。蓋し豊前の妻城中に在り、安芸・加賀に従はず。附し以て考に備ふ　**遠州高天神城主小笠原与八郎氏興**　左京進春儀子、称美作守　**馬伏塚（まぶし）城主小笠原美濃守**　馬伏塚或は真虫（まむし）塚と作す。又伊（この）蚖瑜（まむし）国音転訛す。按ずるに、小笠原家譜、左京進春儀、馬伏塚より移り高天神城主と為る。而して松栄紀事、美濃守と書き、家譜美濃守無きは未詳　**氏真・信玄両将の成敗**（処置）**を観望し、未だ適従を決せず。神祖、小笠原康元及び其の族大膳亮・伊与守**　二人名闕　**に命じ之を招き諭さしむ。康元高天神に往く。氏興信玄に属さんと欲し質を携へ甲府に赴く。諸（これ）と塗（みち）に過（遇カ）ふ。康元諭し納欵せしめ与俱（とも）に岡崎に至る。神祖、其の功を嘉び采邑を加へ給ふ**　年譜・家忠日記・松栄紀事　**信玄の将秋山伯耆晴近**　年譜・家忠日記・松栄紀事、晴近、信友と作す。而して松栄紀事、元亀元年以後晴近と作す。甲陽軍鑑と合ふ。蓋し名を改むるなり。今定め晴近と為す　**久野城に使ひし久能宗能を招かしむ。宗能従はず。晴近怒り平尾村に陳（陣）し久能城を攻む。宗能鼻闕**

淵に拠り之を拒ぐ。是に先んじ神祖、酒井忠次をして宗能を諭し懸川の役に従はしむ。故に晴近の使を拒む。晴近、乃ち営を見付に移す。神祖、奥平道文（監物貞昌子貞勝、剃髪号道文、文或作汶）・菅沼伊豆守満直・菅沼新九郎正員等（松栄紀事、正員或作正貞。蓋誤）をして之と闘はしむ。利あらず。晴近勝に乗じ引間に至り遠州を略せんと欲す。乾城主（乾或作犬井。国音相通）天野宮内右衛門景貫、兵を引き傍近（そのあたり）に会ふ。神祖、使を遣はし晴近を責めて曰はく「吾、引間に在り。遠州を平定せんと欲す。汝何ぞ敢へて梗を為すや（どうして抵抗するのだ）。須らく速やかに引き去るべし。然らざれば吾将に汝を撃たんとす」と。晴近懼れ兵を戢き信州伊奈に帰る。久能宗能、其子千菊丸をして岡崎に質せしめ久能に帰る。神祖、之を褒め書を賜ひ旧邑を授け別に食邑を千菊丸に賜ふ（年譜・家忠日記・松栄紀事）

十二年己巳正月、神祖、懸川城を攻めんと欲し自ら八千余騎を率ゐ吉田に次る。諸将を召し軍謀を諮る。酒井忠次・石川家成・本多廣孝・植村家政・松平弥左衛

門・小栗仁右衛門等前鋒を為す。酒井正親・松平清宗・松平家廣・加藤播磨守景元・平岩親吉・戸田因幡守・松井忠次按ずるに、松井左近忠次、六年閏十二月、松平氏を賜ふ。七年以後当に松平忠次と書くべし。然るに曰はく、時に松平左近真乗有りと。諸書其嫌を避くるに似たり。皆松井と書く。今之に従ふ・菅沼定盈等之に属す。石川数正・本多忠真・其の姪忠勝・天野康景・高力清長等麾下に在り。内藤信成・本多重次・渡辺守綱・榊原弥兵衛等軍監を為す。康景・清長・重次に命じ、令三章を下し軍士に剽掠（掠奪）を禁ず。神祖、浜松橋輪の法華寺に屯す。時に武田信玄小田原を攻め北條氏康父子と戦ふ。信玄駿府に軍す。神祖、山岡半左衛門・植村与左衛門を以て使として信玄に謂はしめて曰はく「今川氏真懸川城に在り。我之を抜くは難からず。然れば則ち大井河を以て界と為し前約の如く卿、須らく駿州を取るべし」と。信玄諾ひて曰はく「遠州、卿須らく略して之を有つべし。豈に敢へて約に倍かんや」と。神祖、乃ち見付の故城を毀ち隍を浚ひ垣を崇くし、将に懸川に逼らんとす。氏真の将朝比奈兵衛尉、引

間を守る。按ずるに、兵衛太夫、兵衛尉一人なるかと疑ふ。然るに兵衛太夫、前に氏真に叛き出奔す。応に復た将たるべからず。故に本書に従ひ二人と定め為す百姓岡崎兵を畏れ繦負し城に入るもの三千人に幾し。流言して参河の大兵懸川・引間を充塞し、人氏を屠らんと欲す、故に遁れ此に至ると言ふ。兵衛尉大いに駭く。

八日、城を棄て走げ懸川城に入る。百姓を諭し岡崎兵を迎ふ。神祖、之を聞き石川数正・天野康景を引間に遣はし城郭を灑掃（そうじする）し百姓を綏撫（安心させる）し引間城に移り入る。

十二日、懸川城を攻む。前軍は桑田邑に陣し後軍は曽我山に陣す。小笠原氏興・久能宗能、天王山に陣し渡辺守綱・本多重次諸軍を巡りて合図す。城兵出て戦ふ。久能宗能、金丸山を攻む。城兵日根野備中・弟弥二右衛門弥吉等善く之を拒ぐ。宗能敗衂し（くじけ）我が兵之を救ふ。互ひに死傷多し。神祖其の功無きを怒る。

十七日、天王山に移営す。松栄紀事

二十日、氏真潜かに使を久能八左衛門の営に遣はし、其の族に勧め、夜我軍を挟撃するを約す。因りて啗（くらわ）すに利を以てす。久能宗能の弟淡路守宗益・佐渡守宗憲・叔父弾正忠宗政及び采女将監等二人名闕皆之に応ず。宗能を招き叛を勧む。宗能従はず。

翌日、氏真、又使を遣はし期を刻み（期日をきめる）明夜営を襲ふを約す。宗益等議し宗能を殺し功を立てんと欲す。八左衛門以為らく「宗能は吾が宗世の嫡なり。質を婁（ひ）き（引き連ねる）岡崎既に（欄外に「君」）居臣の分を定む。之を殺すは不祥（不吉）なり」と。乃ち氏真の使の、を執（とら）へ宗能に報す。宗能、神祖の営に抵（至）り状を告ぐ。神祖、松平与一忠正監物家次子・植村家政・菅沼定盈・三宅総右衛門康貞を以て援を為し久能の牙城を守らしむ。宗能、羅城を守り遂に宗益を撃ち之を殺し、宗憲・宗政及び采女将監を逐ふ。年譜・家忠日記・徳川記・松栄紀事

二十二日夜、神祖、氏真の出兵を策す。大須賀五郎左衛門康高千葉氏之裔、父名闕。後賜松平氏。為遠州横須賀城主・大久保忠世・本多廣孝・松井忠次・水野忠重を以て将と為し兵を懸川城門の側（かたわら）に伏す。今川氏真、久能宗益の殺さるるを知らず。夜深く出兵し営を襲ふ。伏起邀撃す。城兵拒戦し黎明力屈して退く。内藤正成・小阪新助・大久保忠佐尾撃し城に入る。日根野備中兄弟力戦し之を禦ぐ。林藤左衛門・加藤孫二郎・松下新介・小林勝之助重真、戦死す。按ずるに、慶長十九年大坂の役、台廟槍本（奉カ）行に小林勝之助正次有り。蓋し重真の子或は孫なり。未詳 松井忠次の兵、左右田与平・岡田作右衛門・石川新兵衛等槍を提げ突戦す。敵兵死する者多し。備中の従兵伊藤武兵衛、衆に先んじて進み、水野忠重槍を揮ひ之を鏦（っ）き殺し将に首を取らんとす。掠（椋カ）原次右衛門其の首を乞ひ忠重之を許す。次右衛門以て己の功と為す。忠重、又大谷七十郎を撃ち之を殺す。大久保忠佐、近松丹波の首を獲る。家忠日記・松栄紀事。松栄紀事・諸士伝略並び曰はく「忠佐、又敵一人を殺し姪忠鄰をして其の首を取らしむ。忠鄰時に十七歳。己の功に非ざるを以

て肯んぜず。進み敵兵を撃ち首級を獲る」と。按ずるに、十一年堀川の戦、忠鄰首級を獲る。上文を見るに此と本多忠勝の事と叔姪相類す。疑ふらくは伝聞の繆有らんかと。始め此に附し以て後攷を待つ　水野太郎作、日根野弥吉を斬る。内藤信成銃に中りて仆(たおれ)る。敵其の首を取らんと欲す。内藤家長敵を射、之を却く。松平近乗・松平伊忠・内藤正成・渡辺守綱・服部半蔵正総　後称伊賀守。松栄紀事作正成。今訂之　衆に挺(ぬきん)で力戦す。城兵間を伺ひ門を闔(と)じ出でず。諸将、軍を斂(あつ)めて退く。　年譜・家忠日記・松栄紀事

二十三日、城兵、天王山に出陣す。長篠の将菅沼左衛門貞景先登し戦死す。段嶺の将菅沼刑部の族信濃守、敵を撃ち走る。　松栄紀事

二月、神祖、士馬を林(欄外に「休」あり)めんと欲し兵を引き見付に帰る。岡崎兵をして遁(かわ)りて河田村砦を守らしむ。奥平貞能及び菅沼の族をして笠町砦を守らしむ。久能宗能、久能砦を守り、小笠原氏興、曽我山砦を守る。　家忠日記・松栄紀事　神祖、城を鎌田原に築かんと欲し山本成行をして之を経営せしめ、役下(丁カ)を差(つかわ)す。遠州の土豪濵名肥前

守頼廣・後藤佐渡守・気賀の土豪新田友作等未だ服従せず。頼廣の家士諫めて曰はく「家□(康)公、当時の名将たり。浜松皆服す。速やかに降るに如かず」と。供役を点丁(てんてい)(かぞえる)し頼廣之に従ふ。佐渡守に勧め俱に降る。佐渡守騎(の)りて営前に遇ふ。神祖、怒り之を殺さしむ。頼廣罪を懼れ亡げ去る。其の族大谷安芸守政頼、弟金太夫頼次と濵名城に拠り命(めい)を阻む。神祖、本多忠勝・戸田忠次を遣はし濵名・都築二城を視(み)しむ。二人、二城皆険要に拠り之を攻むるに輒(すなわ)ち抜き難しと復命す。神祖、使を遣はし之を諭す。二城降る。忠勝・忠次をして濵名城を戍(まも)らしむ。城兵、多く其の与力と為(な)る。本多信俊をして都筑城を戍らしむ。佐渡守拠る所の日比沢城、兵亦た降り、忠勝・忠次往き之を受く。新田友作、援を失ひ気賀を棄て出奔す。松栄紀事。本書曰はく秋山晴近、去年より遠州に出屯す。神祖、以て国界を定め使を甲府に遣はし其の負約(そむく)を告げしむ。正月八日、信玄の書到り、答以て約の如し。神祖、以為らく「晴近、濡滞(じゅたい=ぐずつく)せば則ち兵を移し之を攻めん」と。晴近恐懼し是の月兵を引き駿州に入る。本書に拠れば、去年十二月、

神祖其の違約を責め、晴近、兵を引き信州伊奈に帰ると。蓋し十二月、神祖、晴近を責め使を甲府に遣はす。而して正月、信玄の書到り、晴近、神祖を畏る。兵を加へ駿府に留めて伊奈に帰るなり。本書折（ママ）二事と為すは誤り。故に書かず。

三月五日、神祖、懸川城を攻む。前軍本多忠勝・松平伊忠、城将朝比奈泰能・三浦監物と戦ひ、伊忠の兵石原十助、城門に向ひ射る。敵之に中る。敵未だ鞍を離れざるに第二矢を放ち之を斃（たお）す。城将、其の矢を注ぐこと迅速なるに感じ、矢を描金の団扇に載せ伊忠の営に送る。

七日、大須賀康高・榊原康政西宿に戦ひ、菅沼三九郎、笠原七郎兵衛を斬る。高橋傳七郎、朝比奈小三郎を斬る。松下加兵衛、菅沼帯刀を斬る。本多正重、新谷小介を斬る。中山是非之助、伊藤左近を斬る。高力清長、粟飯原平左衛門を斬る。各首級を獲る。林傳四郎吉勝、三騎を射殺す。安松矢之助敵の多くの兵を射之を却（しりぞ）く。菅沼定盈、奮戦し、其の兵菅沼弥太郎・今泉甚助等敵と槍を接す。彦阪小作、

箭を放ち多く敵兵を斃す。本多康重年甫十六、敵を撃ち之を殪す。其の兵、本多左馬助・吉見孫八郎及び奥平貞能の兵名倉五郎作、槍を揮ひ刀闘す。松平忠正・菅沼藤蔵定政（兵部少輔定明子、後改土岐氏為山城守）各戦功有り。城将泰能監物及び笠原出羽守等拒戦し退かず。伊藤治部・伊藤掃部等将校多く死し遂に敗走す。凡そ城兵を斬ること一百八十人、加藤市十郎正重以下我兵の死者六十余人。大久保甚十郎重創を被（こうむ）り戦ふ能はず。我兵の善く闘ふ者を熟視し、備（つぶさ）に主将に告ぐ。人其勇に服す。諸将勝に乗り竹牌（はい）を列し□（環）（まる）くして（矢を防ぐため竹を車状にたて）之を攻む。城兵船数艘に乗り懸塚浦に到り我軍の後を邀（せ）めんと欲す。神祖、大須賀康高・榊原康政・鳥居元忠をして之を急撃せしめ、斬る獲（くび）頗る多し。敵兵走舸（か）（はやぶね）にて遁げ去る。（家忠日記・徳川記・徳川歴代・松栄紀事）氏真懸川城を度（はか）り（＝計り、手に入れようとする）終に保つべからず。朝比奈弥太郎泰勝を石川家成・酒井正親の営に遣はし和を乞ふ。（泰勝右兵衛泰雄兄、後更称宗左衛門、子孫事水戸威公）神祖、浅原主殿をして小倉資久に謂は

しめて曰はく「我、幼きより義元の扶助を受け素氏真に帰心す（服従する）、中に讒（悪口を言う）を為す者間を構へ遂に交兵（戦闘）に至る。邦人離叛し封疆（境界）日に蹙る。今遠江全州の地を以て我に与へば則ち北條氏康と協謀し信玄を撃退し、駿府を復さしめん。然らざれば信寺（玄カ）の、遠江を取ること亦駿府の如し」と。氏真聞きて之を然りとす。乃ち資久を神祖の営に遣はし、誓書を齎へ約を定む。懸川は形勝の地なり。糧食充牣す（みちる）。神祖、其の反覆を慮ひ砦数所を築く。作手の将奥平貞能・段嶺の将菅沼刑部・長篠の将菅沼正員をして全（金カ）丸山に拠らしむ。酒井忠次河田村に拠り、小笠原氏興小笠山に拠る。秦湘行記曰、小笠原与八郎居城高天神側有山、曰小笠原山、里民称小笠山、拠此小笠原山即小笠山也 久能宗能久能に拠り之を守る。年譜・家忠日記・松栄紀事神祖、将に岡崎に還らんとす。気賀の残党又起つ。土寇相聚り尾藤主膳・村山修理を以て将と為す。内山党 松栄紀事云、給人と称する百姓なり 及び祠官僧徒等気賀の北呉石邑に麕集す（むらがる）。大川有り。賊隍を鑿ち呉水を湛へ要害と為す。屯聚一千

六百人。之を堀川と謂ふ。松栄紀事。按ずるに、本書十一年三月、尾藤主膳・村山修理堀川城に拠ると。然れば則ち堀川の称此に始まるに非ず。蓋し本書重複、説下見賊徒相議り神祖の帰路を邀たんと欲す。神祖、之を知らず。僅かに十七騎にて過ぐ。賊其の兵の寡きを見、神祖と以為ず。石川数正殿にて過ぐるに及び、賊始めて之を覚り其の出撃せざるを悔ゆ。神祖、岡崎の将兵を発し之を攻む。賊堅守し降らず。小林権大夫戦死す。地勢険隘（険しく狭い）にして急攻し難し。告美邑より海路を取り宇布見邑に至り浜松に陣す。松栄紀事曰はく「山の後平松崎に陣す。古松有り。今猶ほ存す。俗に御殿松と称す」と堀川城は海を枕にし潮盈つれば則ち賊、船に乗り出入す。潮退けば則ち巉岩峭壁（山が鋭く切り立つ）陸路纔に一面なり。

是の日潮大いに落ち我軍斉（いっせいに）攻（欄外に攻の字アリ）し賊を殺すこと其の半ばを過ぎたり。森川氏俊戦功有り。榊原康政先登し創せらる。平井甚五郎・大久保甚十郎・小林平太夫重直等戦死する者十六人。神祖、諸将に命ずるに「百姓を脇従

（かかえ服従させる）せよ。必ず大乱を為すに至らず。屠戮（とりく）（むざんに殺す）すべからず」と。残党六七百人を赦す。子孫今気賀の郷里に在り。神祖、石川数正・弟半三郎の鷙猛（しもう）を以て之を宰治せしむ。寇賊屏息（へい）す（おそれちぢこまる）。松栄紀事。年譜・家忠日記・松栄紀事・年譜附尾並び云ふ「十一年三月、堀川城を攻め之を抜く。大久保甚十郎・平井甚五郎・小林平太夫等戦死す」と。創業記・徳川記・徳川歴代並びて是の年に係く。松栄紀事と合ふ。創業記一説に去年三月七日の事と為す。然れば則ち諸書去年三月に係くるは亦従来する所有り。而して松栄紀事の「戦死三人及び森川氏俊の武功」皆墨出す。然る叙事詳悉なり。蓋し拠る所有らん。故に去年三月堀川城を攻む。下に戦死の人命を刪りて此に書く。二事に非ずと決すと雖も載定する所無し。今並存し以て後考を俟つ

是の月、大沢基胤拠る所の堀江城を攻む。渡辺図書を以て之を監（み）しむ。松栄紀事曰図書山城守茂子菅沼定盈戦功有り。近藤康用甲を被（かむ）らず隍（ほり）を超え城壁に乗る。鈴木重吉戦死す。其の子平兵衛重好嗣ぐ。時に年十二。神祖、其の幼を以て重吉の弟権蔵重俊をして其の衆を代統せしむ。松栄紀事・諸士伝略、重好後称石見守、事水戸威公

四月、基胤降を乞ふ。神祖、之を聴き采邑を故の如くに給ふ。年譜・家忠日記・松栄紀事　基胤の臣中安兵部・権田織部を召し庵下に仕へしむ。松栄紀事　今川氏真猶ほ狐疑を懐き懸川城に在り。奥平貞能・其の子九八郎信昌後為美作守　小倉資久を説き神祖の誓書を齎へ城に抵す。氏真意解す。

五月六日、懸塚浦より船を浮べて去り相州小田原に往く。代々記、正月二十三日と作す。蓋し懸川城を攻むるの日に拠りて終に之と言ふなり。今家忠日記・徳川歴代・松栄紀事に従ふ　北條氏康、其の婦の翁なり。兵を遣はし之を迎ふ。神祖、松平家忠をして護送せしむ。伊豆戸倉に至りて還る。家忠紀伊守家廣の子。上文に見ゆ。家廣卒し紀伊守を襲称す。徳川記、若狭守と作す。徳川歴代、若狭守康信と作す。大いに誤りなり。今家忠日記・松栄紀事に従ふ。雑録、今川義元、氏真を戒め略を書きて曰はく「今汝の年既に長じて成人の度に循はず（大人の考えがない）。徒らに闘鶏走狗を愛し日に児童の嬉を為し、学文せず武を講ぜず将士に親まず軍旅に習はず、其の喪邦覆宗（邦を失い一族を亡ぼす）は必なり」と。言甚だ剴切（ぴったり当てはまる）周摯（充分よくいたる）なり。此に至り其の言皆験かなり。其の年月に攻むれば則ち天文二十二

年二月なり　氏康、朝比奈泰能の終始貳（ふたごころ）無く忠を尽くすを称（ほ）む。氏真以為らく、人臣の法善く之に遇ふと。創業記

二十二日、神祖、懸川城を石川家成に賜ひ之を守らしむ。是に先んじ神祖、三河の将士を中分し二と為（な）す。酒井忠次・石川家成を以て旗頭と為す。西三河の諸将松平左近眞乗　和泉守親乗子　・松平三蔵・島田平蔵・松平信一・松平宮内・酒井正親・内藤金一郎　松栄紀事、喜一郎と作す。按ずるに諸士伝略、弥次右衛門家長初め金一郎と称す。諸書喜一郎と作すは誤り。今之に拠り之を訂す　・平岩親吉・鈴木喜三郎・小原越中守等家成に属す。東三河の諸将松平親次・松平内膳　松家紀事。本書名闕く。按ずるに与一郎忠正の子なり。家廣、内膳と称す。是の時尚ほ幼し。其の余称する無し。内膳は未詳　・松平源七郎・松平又八郎　按ずるに松平伊忠・家忠父子並び又八郎と称す。未だ誰たるを知らず　・松平清宗・松平家忠・松平弥九郎景忠　外記忠次子　・設楽甚三郎・菅沼定盈・西郷新大郎・松平丹波　按ずるに松平系図、此の時丹波と称する者無し。戸田虎千代、松平氏を賜ふ。上文に在り。長じて丹波守に任ぜらる。蓋し追て之を書くなり　・奥平貞能・牧

野新二郎 新二郎咸定九年卒す。上文に在り。蓋し其の子右馬允康成亦新二郎を襲称す。此の書其の初称なり ・鵜殿八郎三郎等忠次に属す。按ずるに鵜殿八郎三郎康定七年正満寺に戦死す。蓋し其の子なり。今考する所無し 懸川城を家成に賜ふに及び、旗頭職を其の姪数正に命ず。松栄紀事、姪、兄と作すは誤り。今之を訂す 而して家成及び大久保忠世・大須賀康高・松平忠次、両族に属さず常に遊軍たり。本多廣孝・本多忠勝・鳥居元忠・榊原康政麾下に護衛す。松栄紀事 神祖既に遠江を得る。

是の月五六百騎を率ゐ郡県を按行す（巡検する）。武田信玄の将山縣昌景駿府に在り。三千余騎を帥ゐ遇金谷路に神祖に遇ふ。下馬し拝謁す。神祖の兵の寡きを見心動く。事を忿（急激な怒り）言に託し（かこつける）急ぎ之を襲はんと欲す。神祖之を覚り兵を退こと五六町ばかり。険隘に拠り之を拒ぐ。前進する者七八騎を斬る。昌景利あらざるを知り引き去る。時の人謂はく「信玄与国の交を為すに未だ幾ならず、約に倍く。曲（まちがい）は昌景に在り」と。信玄之を聞き世人の譏を憚り譴責を議

す。昌景の将佐厚宥を請ふ。乃ち之を釈(ゆる)す。年譜・創業記・家忠日記・徳川記・松栄紀事　是に由り神祖、信玄と絶つ。甲州の兵の懸川城を窺ふを聞き、松平清宗をして石川家成を援(たす)けしむ。清宗、家成の女婿なり。故に之を清宗に命じ西坂塩井原の砦を守らしむ。其の要路を扼し戦功有り。西阪或は新阪・日阪と作す。今秦湘行記に従ふ　神祖之を褒め遠州三邑を賜ふ。北條氏康、薩埵山に屯し日に信玄と挑戦す。神祖、其の虚に乗じ兵を駿府に発し城を攻む。山縣昌景守る能はず城を棄て走る。按ずるに去年十二月、信玄府を焼く。城悉く焦土と為る。蓋し其の後舎館を仮設し昌景をして之を守らしむるなり　信玄以為らく、前に小田原の兵有り、後に岡崎の軍有り、前後に敵を受け進退必ず危しと。兵を引き甲府に還る。氏康亦諸将をして蒲原・大宮・新田・善徳寺・興国寺・中窪・韮山・新條・深沢・山中等十余城を守らしめ小田原に還る。神祖氏康と、氏真を駿府に納むるを議る。然るに城郭灰燼して税駕する（宿す）に地無し。故に氏真戸倉城に在り。岡部正綱及び弟治部右衛門をして府城を修築せしむ。家忠日記・松栄紀事

六月、神祖、兵を発し遠州天方城を攻む。榊原康政前鋒として郭門を攻め破り第二城に進入す。天野康景敵を撃ち創せらる。大久保忠鄰力戦し功有り。城主山内山城降を乞ふ。神祖之を聴き飯田城に進攻し之を抜き守将山内大和を斬る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

八月、久能宗能の功を賞め、嚮（さき）に没する所の反党宗族の旧邑を賜ふ。武田信玄憤る。山縣昌景駿府に敗れ再び之を得んと欲す。

九月、信玄大いに兵を発し先に小田原城を攻む。神祖、松平眞乗をして懸川城を援けしむ。

十月、信玄兵を収め甲府に還る。氏康の兵と相州三増に戦ふ。之を敗り駿河・伊豆数城を攻め之を抜く。氏康の諸将、信玄の、相州を寇むるを聞き、各守る所の城寨を棄て小田原に帰り之を拒がんと欲す。独り北條新三郎氏時新九郎長氏孫幼庵子のみ蒲原城を守り去らず。

十一月、信玄又甲府を発し駿豆の地を徇(めぐ)り軍声大いに振ふ。

十二月、駿府城を攻めんと欲し蒲原城を過ぐ。氏時之と戦ひ敗死す。信玄駿府城に進攻す。岡部正綱堅守し下らず。信玄啗(くらわ)すに重き利を以てし之を誘ふ。正綱之を信じて降る。信玄又府城を取り兵を分け榛原郡小山城に拠る。神祖、兵を率ゐ之を攻む。松平眞乗の戦功を賞め禄として小山八邑、吉永・西嶋・幸玉・藤窪・星窪・山川・舟市・山梨の二千貫地を賜ふ。家忠日記・松栄紀事・諸士伝略 是に先んじ松平康俊甲府に拘幽せらる（閉じ込められる）。是の月伊賀の諜伴中務を以て計らしむ。大風雪夜、酔ひ飽き守る者其の怠を伺ひ、険を冒し岡崎に逃げ帰る。雪を踏み皸(くん)（ひび、あかぎれ）瘃(ちょく)（しもやけ）し足指皆堕つ。家忠日記・松栄紀事・徳川歴代並奥（ママ）年月、年譜附尾係年月。蓋し信玄駿府に出陣し其の間に乗じて逃げ帰るなり。今之に従ふ

烈祖成績巻之二終